Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

ニクラス・ルーマンのシュッツ論 : 社会学的な「意味」の問題への取り組みに即して

梅村, 麦生

(Citation)
社会学雑誌,31/32:52-69

(Issue Date)
2016-10-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041377

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041377

KOBE UNIVERSITY

ニクラス・ルーマンのシュッツ論

――社会学的な「意味」の問題への取り組みに即して――

梅村麦生
神戸大学大学院人文学研究科研究員

本稿は、N・ルーマンがA・シュッツの議論をいかに論じ、またいかに自身の社会理論に取り入れ発展させているのかについて検討する。ルーマンは社会学の方法論的な関心からシュッツの社会科学論を導入し、またE・フッサールの現象学的な意味分析の方法を導入するための手がかりとしている。そしてルーマンは、社会学において「意味」の問題を論じる際に、シュッツのいくつかの議論を取り入れている。しかしルーマンが自身の社会理論を発展させるにあたって、シュッツへの評価も違いを見せるようになる。そこで本稿では、特に後期のルーマンが表明している、シュッツとルーマンの相違にも注目する。しかしなお、その相違を踏まえた上でも、シュッツとルーマンの間には、特に社会学的な「意味」の問題に関して、「社会的」な関係と人間的な「時間」の関わりを問うという点で共通している。またそこに、生物学的・人間学的な「環境」論が背景として浮上する。

はじめに

本稿は、N・ルーマンがA・シュッツの議論をいかに自身の社会理論に導入し、またいかに論じているのかについて検討する。両者はE・フッサールの現象学的な意味分析の方法を参照している点で共通し、またルーマンはフッサールの知見を導入する際にシュッツの行為理論を参考にしている。ところでルーマンは、自身の社会理論を時期によって漸次的に発展させており、特に『社会システム理論』(Luhmann 1984＝一九九三―一九九五)が劃期をなしているとされる[1]。ルーマンのシュッツに対する評価もまた、この著作に代表される時期に変化があり、特に意見を異にする点が露わになっている。そして両者が一致ないし離反する点は、社会学における「意味」の問題に関して示唆が

ある。[2] 本稿では以上の点に関して、ルーマンがシュッツに直接言及しているところを参照しながら検討する。

以下ではまず、ルーマンがいかなる問題関心の下でシュッツを参照するに至ったかを見て、それから便宜上『社会システム理論』刊行前を前期ルーマン、それ以後を後期ルーマンとして、各段階におけるシュッツ論を追跡する。それらを踏まえて、社会学における意味の問題への取り組みという観点から、本稿のまとめを記す。

一　ルーマンによるシュッツ導入の経緯

シュッツの名は、彼の死後にアメリカで『著作集』(*Collected Papers*, 1962―) が刊行され、また彼の弟子や影響を受けた者たちの活動を通して、社会学の中で広く知られるようになった。[3] ルーマンによるシュッツへの言及も、この著作集の刊行以後に始まる。

一―一　比較と合理性

ルーマンによるシュッツへの言及は、まずLuhmann (1964b = 一九八三a) にある。その論文では、比較の方法として機能主義を用いる等価機能法と社会的システムの理論との接合を試みており、ある問題に対する「問題解決」を、因果の確定ではなく、可能な様々な代替選択肢を「比較」する試みとして読み替える中で、フッサールの「開かれた可能性」と「問題的な可能性」の区別を参照し、またSchutz (1962b: 79ff. = 一九八三b：一五〇以下) の解説を引いている (Luhmann, 1964b: 6 = 一九八三a：二四、六一(一六))。

ルーマンはこの論文の結論としての「テーゼ」を、以下のようにまとめている。

> 比較の方法 (vergleichende Methode) とシステム／環境―理論とは、行為についての一つの解釈を、機能的に等価な代替選択肢たちの視点の下で得ようと努めるものであり、行為者たちを彼ら自身にとって可能な一つの合理性という光の下で理解し、そうすることを通して理論と実践の世界の統一をよりよく描きうるようにするものである。(Luhmann, 1964b: 23 = 一九八三a：五四)

ここで比較の視点の下で行為を理解し、なおかつ行為者自身にとって可能な合理性という視点の下で行為者たちを理解することを、機能主義とシステム理論を接合する目的としている。この箇所で直接シュッツには言及されていないが、「行為者たち自身にとって可能な合理性」を、まさしくシュッツは追求したのであり、ルーマンが等価機能法の準拠点としてシステム理論を採用する理由もここに

つながっている。[4] そこで「比較に基づく合理性という構想が現象学と機能主義とを互いに近づけるのにふさわしい」(Luhmann, 1964b: 66 = 一九八三a：六八) として、シュッツとフッサールの研究を参照している。

Luhmann (1968b = 一九九〇) はさらに、いわゆる「合理性」を単独の行為ではなくシステムに結びつけて理解することを提起し、その発想の先駆にT・パーソンズの『社会的行為の構造』を挙げた上で、より進んだ定式化としてシュッツの「社会的世界における合理性の問題」を示している (Luhmann, 1968b: 30-31 = 一九九〇：八、二七三 (七、八))。そこでルーマンは目的／手段図式が単なる事態の記述ではなく、行為分析のための索出的な図式、比較の技術であるとし、比較の論理を扱う研究では一般に比較の「視点」が必要とされているが、「この視点を選択するための視点」には決定的な根拠がないということを、フッサールとシュッツの論考を示しながら論じている。[5] その上で、比較の技術には「境界設定」が、そして境界設定とその維持には「視点」だけでは不十分で「システム形成」が必要なため、「視点から考えること」と「システムから考えること」を隔てる敷居が乗り越えられなければならない、と主張する (Luhmann, 1968b: 48-49 = 一九九〇：三一―三二、二八一 (五〇))。

一―二 社会理論における意味の問題

ルーマンによるシュッツとフッサールへの言及は、社会理論における「意味」の問題への取り組みとともに本格化する。Luhmann (1967a = 一九八三b) はパーソンズが「二重の偶有性」(double contingency) として定式化した他者の予測不可能性の問題を社会的な「複雑性」(Komplexität) として論じ、この複雑性を記述するためにフッサール後期の研究とシュッツを含めた後継者たちが取り組んだ「意味の間主観的構成」(intersubjektive Konstitution von Sinn) の理論を参照すべきとしている (Luhmann, 1967a: 105-106 = 一九八三b：八七―八八、一一八 (一五、一六))。[6] さらにLuhmann (1967b = 一九八三c) は、「行為理論的な基礎にもとづいて構想された構造―機能理論」の欠点が熟慮されていない「意味概念」にあるとして、フッサールに由来するという「他の可能性からの選択」かつ「他の可能性への参照」である意味概念を提起している (Luhmann, 1967b: 618-619, 639 (10) = 一九八三c：一三二―一三三、一六九 (一〇))。こうした社会学的な意味概念の不明瞭さを批判し、そこにフッサールの分析を導入するという試みは、シュッツが『意味構成』で行なった立論であった。[7] ただしルーマンは、フッサールが提起した意味が地平を伴うという点を、シュッツもまた捉え損なっていると付け加えている。

翻って、Luhmann（1968a＝一九八八）では、「常にすでに間主観的に構成された世界に他我がいるという事実」がフッサールの超越論的現象学までも含めて哲学では適切に捉えられておらず、むしろ他者の予測不可能性からの秩序化を説く実証科学にそれを捉える可能性があるとして、パーソンズの「二重の偶有性」と併せて、シュッツの「類型化」を他我の存在による「予測不可能な複雑性」に基づく議論として挙げている（Luhmann, 1968a: 4-5 (10)＝一九八八：一三―一四、一六一―一六二（一〇））。

このようにルーマンは、社会理論における比較の準拠点の問題を提起し、そこに「合理性」を位置づける上でシュッツを参照していた。比較の準拠点に関する議論は、ルーマン自身の「等価機能主義」の試みの延長にある[9]。また「行為者自身にとって可能な合理性」を追求する中で、合理性を単独の行為と行為者の下にではなく、システムの連関の内に位置づけることを説く点で、行為者自身の主観的な意味に接近するというシュッツの狙いと前提の部分を共有する。

さらにルーマンが現象学の知見を導入していくのが、社会理論における「意味」の問題、当初の表現で言えば「意味の間主観的構成」の問題に関してであった。そしてこの試みは、「社会学の基礎概念としての意味」（Luhmann,1971＝一九八七）（以下、「意味」論文）で一旦の完成を見る。次節では、ルーマンによる社会理論への現象学的な意味の構成分析の導入と、そこでどのようにシュッツの議論を取り入れているのかを見ていく。

二　ルーマンによる社会理論への現象学的な意味の構成分析の導入――前期ルーマンのシュッツ論

「意味」論文のルーマンも、上で見たように社会学における「意味概念」の曖昧さや「意味の間主観的構成」の議論の必要性を指摘した上で、意味概念の規定を行なっている。

二―一　現象学的な意味の構成分析と意味構成システム

この論文でルーマンは、現象学と解釈学の中で展開されてきたとする「意味形象の分析」の方法を、「目の前にある（vorhanden）意味」を「抽象化」し「代替選択肢として構築（Konstruktion）する技術」として、また特にフッサールの「意識内在的超越」（bewußtseinsimmanente Transtendenz）に基づく意味理論から、「意味」は「常に限定可能な諸連関の中で現われ」かつ「自身が属する連関を越えて参照を行なう」という知見を、導入している。かつルーマンは、意味を「主体」にではなく「システム」に準拠させ、「システムの概念と世界（Welt）ないし環境

(Umwelt) の概念」を用いて「意味を構成するシステム」(sinnkonstituierende Systeme) の下で扱う。意味の機能の実現にはこの種のシステムが必要となるとした上で、「意味的 (sinnhaft) な体験と行為にとって典型的な構成関係 (Konstitutionsverhältnis)」を「意味を構成するシステムとしての意味システム (Sinnsysteme)」として論じ、ここに「心的システム」(意識) と「社会的システム」(社会) の二つを含めている (Luhmann, 1971: 28-31 = 一九八七：三三―三五)[10]。

「意味」論文では、シュッツよりもフッサールに遡って意味の構成分析が参照されているが、以下に見るように意味概念の詳細を記述する段で、シュッツの議論が登場する。

二―二　意味の間主観的構成の問題と意味の三次元

「意味」論文は意味の機能として、顕在性／潜在性の分化、複雑性の縮減と保持、また否定作用による一般化を挙げ、意味の「同一性」のためには事象的 (sachlich)、社会的 (sozial)、時間的 (zeitlich) な次元の分化が必要であると記している。これは以前「行動予期の一般化」の三次元としたものと同じであり[11]、各次元の非同一性が互いの同一性を支えているとしている。そしてルーマンは、意味の社会的次元と事象的次元、そして時間的次元との関わりを論じるに際して、シュッツの分析を参照している。

(一) 意味の社会的次元の非同一性と事象的次元の同一性との関係

「意味」論文でルーマンは、他在 (Anderssein) の否定による事象的次元の同一性が社会的次元 (＝自我と他我の差異) を可能にし、また社会的次元の非同一性が、事象的次元の同一性を可能にすると主張している (Luhmann, 1971: 48-51 = 一九八七：五二―五五)。そこでルーマンが参照していると考えられるのが、シュッツの「視角の相互性」(reciprocity of perspectives) の議論 (参照：Schutz, 1962c: 11-13 = 一九八三c：五九―六二) である。

シュッツの「視角の相互性」[12]の議論によれば、「日常生活の常識的な思考による自然的態度」の下で、「私は知性をもつ仲間たち (intelligent fellow-men) が存在していることを自明視」しており、また「世界の諸対象」がこの仲間たちにとって「接近可能」で彼らに知られている (か、知られる可能性がある) ことも「知っており、しかも疑うことなく自明視している」(Schutz, 1962c: 11 = 一九八三c：五九)。ただし私は、「『同一』の対象 (the "same" object)」といえども、私と仲間内の誰かに対して「厳密に言えば異なった何かを意味している」はずということも「知っており」、「自明視」している。その上で、こうした「個人間の視角の差異」は、私がいる「ここ」と彼らがいる「そこ」という立ち位置の違い、また各人の生活史的

に規定された状況、当面の目的、その目的に関わる有意性の体系の違いに由来し、その差異は「常識的な思考」による「立場の相互交換可能性（interchangeability of the standpoints）」と「有意性の体系の一致（congruency of the system of relevances）」という二つの基本的な「理念化」（idealization）によって乗り越えられている（Schutz, 1962c 12＝一九八三c：六〇―六一）。

シュッツは、常識的思考によるこの二つの理念化が「相互的視角の一般定立」（the general thesis of reciprocal perspectives）を可能にし、その下で「類型化」される「思考の対象からなる構築物」（constructs of objects of thought）を通してわれわれは、仲間たちの存在と、彼らにとって接近可能な「同一」の対象を自明視していると述べる。そうして、私や「われわれ」と仲間たちの間にある差異と対象の同一性との、「理念化」による「相互的視角の一般化」を介した関わりを論じている。

ルーマンは同様の関係を、体験の「社会的次元」が「事象的な同一化（Identifikation）」との関連で「構成される」（sichkonstituieren）こととして論じている。つまり、ある「非自我」（Nicht-Ich）が「他の自我」（anderes Ich〔他我〕）として「認識」され、自我とは異なる「固有の体験と世界視角の担い手」つまり「他の固有の視角」（die andere eigene Perspektive）として「体験」される中で、自我は「その他我の視角自体を顕在化したり、その他我の体験を追体験したりすることを学ぶことができる」。そして、

> 他者が固有の視角を顕在化することは、自我（mich）に対してもこの視角が顕在化されうる可能性を保証する。複数の視角は、位置の交換によって取り替え可能なものとなる。そうした視角はある対象の同一的に保たれた意味（つまり、事象上の非他性〔sachliche Nicht-Andersheit〕）に支えられ、また交換を遂行する中でその対象の同一性を保証することによって、移送可能なものとなる。このようにして初めて、意識における選択性は構成されるのである。（Luhmann, 1971: 51＝一九八七：五五）

反対に事象的次元の前提には社会的次元の非同一性があり、「意味的・対象的世界の間主観的構成の過程にとって、体験する諸主観の非同一性（*Nichtidentität der erlebenden Subjekte*）は根本的な前提である」とルーマンは見ている。この非同一性によって「主観」と「自身の体験内容」との「距離化」が可能になり、対象が「すべての主観に対して接近可能なもの」となり「その対象の意味の中で自立性を持つ」ことで、その対象から「世界についての視角上の補整が生じ」、自身の視角を「他の可能な諸

視角の中の一つ」と見なす「反省的意識」が生じる、という。そこで「共に機能する他の諸主観」が、「個々の主観の顕在的意識」から個人の体験内容だけで世界の可能性を担うという「負担を免除」(entlasten)し、そうして「ある複雑な世界」が「顕在的な意識の潜在性の地平」「あらゆる選択の出所として構成される」とルーマンは記している(Luhmann, 1971: 51-52 = 一九八七：五五―五六)[13]。

ルーマンは以上のように、立場の相互交換の可能性と対象の同一性との間の連関を、社会的次元の非同一性と事象的次元の同一性の連関と捉え、特に社会的次元の非同一性(自我／他我の非同一性)によって「潜在性の地平」としての複雑な世界が構成されるということ、つまり「意味的・対象的世界の間主観的構成」が可能になることを示している。

(二)意味の社会的次元の非同一性と時間的次元の同一性の関係

さらにルーマンは、意味の社会的次元の非同一性を可能にする時間的次元での縮減として、「体験を行なう諸主観の間にいかなる時間的な相違もあってはならない」とする(Luhmann, 1971: 54 = 一九八七：五八)。そのため「諸主観の顕在的な体験」が「時間的に同期(synchronisieren)」されて「同時」(gleichzeitig)に経過しなければならず、時間の遅れや加速は「純粋に主観的な視角に帰属され、錯覚として差し引かれなければならない」と。他者の未来を自身の未来としたり自身の現在を過去と置き換えたりするような、時間における「個別的な放浪」は、「時間的な複雑性と社会的な複雑性との法外な掛け合わせ」によって過負荷をもたらすため「同期化」(Synchronisation)によって排除されているとして、

> 誰しも他者の未来へと先に飛び込んだり、自分の過去に留まり続けたりする必要はない。あらゆる人間は共に等しく年をとる(Alle Menschen altern gemeinsam und gleichmäßig)。このようにして、間主観的に構成された時間という単位によって、体験視角の移送可能性が保証されると同時に、またそれによって世界への共通の接近可能性も保証される。(Luhmann, 1971: 54-55 = 一九八七：五八―五九)[14]

ルーマンはここで、意味の社会的次元における自我と他我の非同一性と共存が成立するために、時間的次元の同一性つまり同時性が必要であることを説き、シュッツの『意味構成』第二十節「他者の体験流の同時性」を参照指示して「共に年をとること」の議論を引いている(Luhmann, 1971: 54-55 (31) = 一九八七：一一三―一一四(三一))。

『意味構成』のシュッツは、「自我」(das Ich)は対面関

係にある他者「汝」（das Du）と「特殊な意味で『同時的』（gleichzeitig）」であり、つまり両者が「共在」（koexistieren）し両者の持続が「交差」（einander schneiden）することによって、「経過中の汝の体験を眺めることができる」としていた（Schütz, 2004: 226 = 二〇〇六：一六二）。シュッツは「同時的」な「二つの持続の共在」が、両者の「持続の構造」が「同種」（gleichartig）であるという「本質的に必然的な仮定」を示すとして、「物」（Ding）があくまで「客観的な時間の経過の中で不動である」のに対し、「汝は自身が年をとること（sein Altern）を体験し、この事実から他のあらゆる体験が構成される」という意味で「自我の持続と同様に真の持続（durée）」つまり「自分自身を体験する連続的で多様、そして不可逆的な持続（durée）である」としている。よって、自我と汝がそれぞれ「自分自身の持続」を「（ベルクソンの意味での）絶対的リアリティとして体験」するだけでなく、「自我に対しても汝の持続」が、また「汝に対しても自我の持続が絶対的リアリティとして与えられている」。「二つの持続の同時性（*Gleichzeitigkeit zweiter Dauern*）」とは、こうして「共に年をとること（*Zusammenaltern*）」に他ならない、という（Schütz, 2004: 226-227 = 二〇〇六：一六三―一六四）。

またSchutz(1962a: 174 = 一九八三a：二六六)も「他我」（alter ego）が「生き生きとした現在（vivid present）において体験することのできる主観的な思考の流れ」であるとして、この他我とわれわれ自身の意識の流れは「同時的」（simultaneous）であり、「われわれは同じ生き生きとした現在を共有」し、つまり「われわれは共に年をとっている（we grow old together）」と説く。さらにこの「生き生きとした現在」を共有する中で他者の意識の流れを体験することを「他我存在の一般定立」（general thesis of the alter ego's existence）と呼び、このことは私以外の思考の流れが「私自身の意識と同じ時間構造を示していること」を含意するとしている。ルーマンはシュッツのこうした「同時性」の議論を、意味の社会的次元を可能にするための、時間的次元での縮減として捉えている。

以上のように、「意味」論文のルーマンは、意味の同一性を可能にする三次元の分化として事象的次元、社会的次元、時間的次元を挙げ、特に社会的次元の非同一性を支える事象的次元の同一性と時間的次元の同一性に関して、シュッツの「視角の相互性」と「同時性」の議論を参照していた。しかしルーマンは、シュッツの説をそのまま受け容れているわけではない。とりわけ後期ルーマンになると、その違いをより鮮明にさせるようになる。

三　現象学的な行為理論とシステム理論的な社会理論の疎隔——後期ルーマンのシュッツ論

ルーマンは『社会システム理論』で社会理論にオートポイエーシス論を導入する試みを体系化し、社会的システムをオートポイエティックなコミュニケーション・システムとして捉えるに至る。以降もシステム／環境の区別を用い、社会的なものをシステムの下で論じる点に違いはないが、いくつかの点で変化があり、シュッツとの差異もより明確にされていく。

三―一　間主観性かコミュニケーションか

第一の変化は、「間主観性」をより批判的な視点から論じるようになったことにある。『社会システム理論』でルーマンは、意味の社会的次元が他の次元と同様に「二重の地平によって構成」されていること、つまり「自我」（Ego）と「他我」（Alter）が異なる統握の視角に関わりそれぞれで「地平を保持している」ことが社会的次元の「自立性にとって構成的（konstitutiv）」であるとした上で、「社会的なもの（Soziales）をあるモナド的な主体の意識の能作（Leistung）に還元することはやはりできない。それゆえに、『間主観性』の主観的な構成（subjektive Konstitution von "Intersubjektivität"）の理論の試みはすべて挫折したのである」と述べている（Luhmann, 1984: 120 = 一九九三：一二四―一二五）[15]。

ルーマンは、「間主観性」（Intersubjektivität）が「主観」（Subjekt）に依拠してのみ立てられる問題であるからこそ挫折せざるを得なかったと指摘する。Luhmann（1986b: 42 = 二〇〇七a：一六八）は、「間主観性の問題」が「主観理論」の文脈と用語で提起されていながら、その理論の撤回を暗に求めるものであり、「あらゆる主観が自身に固有の間主観性」をもつゆえに「間」（Inter）と「主観」は矛盾するとしている[16]。そして「間主観性」の統一ではなく「社会的なもの（das Soziale）それ自体が統一的なものとして実現されている」ことから出発し、「意識の自己言及的な閉じ」を独自の「主観性」として認めればこそ、社会的なものの統一は「意識の外側で生じうる」と見るべきとした上で、「複数の主観性の『間』という関係的な手法を、はるかに豊かな分析可能性を提供するシステム理論的な手法によって置き換える」ことを提起している（Luhmann, 1986b: 49-50 = 二〇〇七a：一七八）。

後期ルーマンも、自我と他我が異なる視角と地平を有し、それが意味の社会的次元の前提をなすと説く点では変わりがないが、その事態は諸主観の統一としての間主観性ではなく、社会的なものつまりコミュニケーションそれ自体の統一によって表すのが適当であると主張している。

Luhmann（1997: 874-875＝二〇〇九：一一七二）に従えば、「社会的諸関係が機能していくこと」にとって、「間主観性」や「合意」（Konsens）ではなく「コミュニケーションが継続されていく」こと自体が決定的であり、「コミュニケーション」を「主体」や「社会的アプリオリ」、「生活世界」あるいは他の何かに帰すことはできない、という。

三―二　所与としての生活世界か、差異の統一またはパラドックスとしての世界か

後期ルーマンは「世界」概念についてもより明確な規定を与え、「生活世界」概念もそれに合わせて評価している。前期ルーマンがすでに、システムは環境から区別されて初めて成り立つのであり、自身と区別される「いかなる外部」も持たない「世界」を、「システムとして把握することはできない」と記していた（Luhmann, 1967b: 617-618＝一九八三c：一三〇―一三一）。したがって「複雑性」の観点の下で世界は「問題」として現われる、という。『社会システム理論』では、「世界」を「システムと環境との差異の意味統一（Sinneinheit）」として、差異を超えた統一ではあるが差異を通してのみ把握されうるものとして、パラドキシカルに規定している（Luhmann, 1984: 283＝一九九三：三二八―三二九）。そこで「世界」もまた「差異なしに考えることはできない」ものとして与えられる限りで、「システム形成を通して、またシステム形成に相関して、世界はある差異の統一（Einheit einer Differenz）として規定可能なものとなる」とする。そして「自身を環境から区別すること」ができ、そうすることで「差異の統一」を「二つの無限なるもの、つまり内部と外部とを包括する統一として反省（reflektieren）」できるのが「意味システム」である以上、「世界概念」は、「意味システムにとってのみ顕在的となりうる統一を指し示している」、と。

したがってこの意味での世界とは、意味システムの分出によって、つまりシステムと環境の差異によって構成されるものである。その限りでの世界は（現象として与えられている世界とは異なり）根源的なものでもなければ原型的なものでもなく、ある差異に付随する表象としての最終統一なのである。そうした世界とは、原罪以降の世界である。（Luhmann, 1984: 283-284＝一九九三：三二九）

ルーマンはこのように、「世界」を意味システムの分出に相関するものと捉えた上で、「世界」を自身の外側にあるものや、「世界外的（extramundan）な主体」と対峙するもの、また「意識の相関物」（フッサール）や「間主観的に構成」されるもの（シュッツほか）と見な

す立場を斥けている（Luhmann, 1984: 283 = 一九九三：三二八、四一七（六六―六八））。

また「生活世界」に関しても、ルーマンは差異やシステム形成との相関で論じている。特に「生活世界」概念の曖昧さと、シュッツを含むフッサール以降の論者がフッサールの「超越論的前提」を受容せずにこの概念を用いる点を批判する（Luhmann, 1986a: 176 = 一九九八：一〇一、一一〇（一、二））。そこで「生活世界」自体を問題化すると、これが「一つの世界」なのか、だとすると「他の世界」は「生活世界」の内側と外側のどちらにあるのか、さらに「多数の世界」を含む「世界」とはいかなるものかといった疑問が生じ、フッサールの「地平」（Horizont）と「地盤」（Boden）のメタファーも互いに矛盾しており、「生活世界についての従来の言明」はそうした矛盾によって破綻する、という（Luhmann, 1986a: 177 = 一九九八：一〇二―一〇三、一一一（三、四））。ルーマン自身は生活世界に対しても、現象学的な「本質的な相における記述」ではなく、「操作的（operativ）な接近」を試みること、[17] つまりフッサールのように「統一根拠」（Einheitsgrund）ではなく、「いかなる区別が生活世界を構成するのかという問い」へ立ち戻ることを提案している（Luhmann, 1986a: 194 = 一九九八：一二〇）。その上で「慣れ親しまれた（vertraut）／慣れ親しまれていない（unvertraut）」の区別を用い、「生活世界」を「慣れ親しまれたもの」による「意味凝縮物の指示連関」として扱っている（Luhmann, 1986a: 180-182 = 一九九八：一〇六―一〇八）。

後期ルーマンはこのように「間主観性」や「生活世界」の概念を、差異や区別に基づく観点から批判的に論じ、[18] また何らかの区別に基づくものとして読み替えている。

三―三　我と汝の同時性と、システム／環境の同時性

前期ルーマンが意味の時間的次元での縮減としていた「同時性」と「共に年をとること」に関しては、新たな規定を加えて、後期でもシュッツを参照している。『社会システム理論』は、瞬間的な要素しか持たないシステムと環境の接触の仕方として「同時性」を論じている。システムが「出来事」（Ereignis）の性格を持つ「要素」（Elemente）に基づいていることにより、環境との間に「一対一の対応」が存在しえなくなり、それゆえシステムと環境の間で「各時点（Zeitpunkte）の同一性」、「それらの時点間の関係の同一性」、要するに「等しい時間の流れ（gleichmäßiges Fließen der Zeit）」が必要になるとした上でルーマンは、シュッツの「共に年をとること」（gemeinsames Altern）に言及しながら、いかなるシステムも他のシステムより先に未来へ進むことはできず、環境との接触に必要な「同時性」（Gleichzeitigkeit）を免れら

れないのであり、「環境とシステムの差異」は「同時的なもの（gleichzeitige）としてのみ確立されうる」として、システムにとって「環境」との「継続的な結びつきは、共通の時系列（gemeinsame Chronologie）を前提としている」と結論づけている（Luhmann, 1984: 254(24) = 一九九三：二九三―二九四、四二三（二四））。

Luhmann（1987: 314 = 一九九三：一一五―一一六）もまた、システムと環境の接触の問題としての「同時性」はシステムが「出来事」の要素を持つことによるとして、システムの「出来事の統一」が「環境には対応するものが存在しない一つの内的な構築物（ein inneres Konstrukt）」でありながら、その出来事との「同時性」（Simltaneität）、つまり「ある瞬間」にシステムと環境のそれぞれの内で顕在的なものの間の「同時性」（Gleichzeitigkeit）として、システムは環境を把握しうるとしている。そのためシステムと環境の接触も常に瞬時的なものである、と。さらに註記で、「同時性」の機能はシステムが環境に対して持つ接触のリアリティにあるとする知見を、まず生物学の研究に、そして社会学ではシュッツに萌芽が見られると述べ、また「間主観性」に関しても、意識システムとコミュニケーション・システムとの同時的な関係（異なるシステム同士の関係としての「相互浸透」）として捉え直すことを示唆している（Luhmann, 1987: 323 (23, 24) = 一二三―一二四（一二三、二四））。

加えてLuhmann（1990a: 42）は、構成主義的な観点から、「認識」を行うシステムのリアリティについて論じる中で、脳、意識、さらにコミュニケーション・システムとしての社会まで含む「認知的システム」は、「現れるやいなや再び消滅」し絶えず他の出来事に置き換えられる「瞬間的な顕在性」だけを持つ「出来事（Ereignisse）という基礎の上で作動する」がゆえに、環境との時間関係を「同時性」（Gleichzeitigkeit）としてのみ持つと述べ。そうした「認知的システム」の「リアリティの基礎」は、「自身の作動とその作動を支えるリアリティの条件との同時性である」としている。続きでは、システムと環境が「同時」であると言っても、環境内の要素がシステムの要素に影響を与えたり「同期」（synchronisieren）されたりするわけではない、と補足している。システムは自身に関わる時間を構成するが、環境との「同時性」を任意に処理しえず、しかもそれゆえにこそ、未来、現在、過去という「時間の区別」を手に入れることができる、と。ここで「システムのあらゆる作動の中でそのつど瞬間的に再生産される同時性」を示すものとして、シュッツの「共に年をとること」と、ジャン＝ジャック・ルソーの「サン・ピエール島の湖畔の波音」を例に挙げている。

またLuhmann（1990b: 99）[19]は、「時間の区別」がない状

態を示すためには「事象の区別」つまり「生起するものの事象的な相違」が前提になるとして、「同時性」は単なる未分化の状態ではなく、システム理論的に言えば「システムと環境の分化の一側面であり、その分化によって生じるものである」としている。「そうした差異が開けることで初めて、システムと環境が同時（gleichzeitig）に世界の中に置かれることになる」と[34]。

このように後期ルーマンは「同時性」を、システムと環境の間の「同時性」として扱っている。システムは環境と「同時」にあり、その限りでシステムにとってリアリティは環境との「同時性」の内にある。しかし、当のシステムを離れて環境があるわけではなく、その限りで同時性もまたシステムによって捉えられたものにすぎない。つまり、システムと環境の分化によって初めてシステムと環境との同時性が与えられるのであり、ある差異によって初めて同時にシステムと環境とが与えられている。観察者の観点から見ればこの同時性は、ある観察者による区別を通して区別されたものの間の同時性である。

おわりに

ルーマンは、社会学における方法論の問題と「意味」の問題から、シュッツの議論を参照し、フッサールに由来する現象学的な意味の構成分析の手法を導入した。方法論に関しては、比較を通した合理性へのアプローチと、科学的観察者の側にとどまらない視点を探る点で、軌を一にしている。理論内容に関しては、ルーマンが意味の事象的・社会的・時間的次元の関わりを論じるに際して、シュッツの意味理論を援用している。しかし後期になるにつれて、シュッツの行為理論とルーマンの社会理論の出発点の違いがより明確化されるようになる。ルーマンにとってそれは、主体とその行為から出発するアプローチと、社会とそこでのコミュニケーションから出発するアプローチの違いであり、さらにルーマンが差異理論としてのシステム理論を導入していることの帰結でもある。

しかし、シュッツとルーマンの両者を、単に主体からと社会からのアプローチの違いで片付けられるわけではない。むしろこの違いを踏まえた上で、後期ルーマンがなおシュッツと共通するものとして参照しているのが、意味を用いる何ものかと「他者」や「環境」との関係としての「同時性」という視点である。さらにこの背景には、シュッツとルーマンが取り入れている、生物学や人間学の分野での

「環境」や「時間」についての研究がある。ここにシュッツとルーマンから、社会学における「意味」の問題系として、「他者」や「環境」との「同時」的な結びつき、言い換えると社会的な関係と人間的な時間との結びつきを「意味」の下で問う、社会学的・人間学的な問いの系譜を見出すことができる。結論として、社会学における「意味」の問題について論じるためにも、この「環境」（他者）と「時間」（同時性）についての彼らの議論をさらに検討する必要がある。

註

（1）Kneer/Nassehi（1993: 34＝一九九五：三九）、馬場（二〇〇一：二―三）、長岡（二〇〇七：三一）など参照。長岡に従えば、その転換では第一に「社会的システム」（soziale Systeme）の要素を「行為」から「コミュニケーション」へ、第二にシステムの自己選択的な働きを指す概念を「自己言及」から「オートポイエーシス」に変えている。

（2）従来のルーマン研究では、フッサールとの対比の方が注目されている。例えば、Knudsen（2006）、Nassehi（2012）を参照。またルーマンの意味理論におけるフッサールの位置づけについて、Schützeichel（2003: 32-33 (1)）も参照。ルーマンとシュッツの部分的な対比としては、Knudsen（2006: 13）、Nassehi（2008: 110）、Jahraus ほか（2012: 318）、また理論比較としては、Dallinger（1999）、吉澤（二〇〇二）、大黒屋（二〇〇二）、多田（二〇一三：一一五―一二六ほか）を参照。

（3）例えば、Wagner（1983: 239-259）、森（二〇〇一：一一四―一四二）、Barber（2004: 219-229）を参照。

（4）この視点に関して Luhmann（1964a: 41＝一九九二：五一）は、公式組織の「公式性」（Formalität）の基準を「成員役割」とすることで、「行為連関をシステムとして観察」する「視点」を提供すると共にそのための「状況を定義する」ことができ、それゆえ「公式組織」が「科学によってのみならず、組織の成員たちによっても日常生活の中でシステムとして体験され取り扱われる社会的秩序である」ことを示すことができるとしている。

（5）そこでは「相等性（平等）」（Gleichheit, equality）と、それを可能にする「比較の視点」に関して、フッサールの『論理学研究』第二巻第一部、Schutz（1964＝一九九一）、また Luhmann（1965b: 54 (16)）を参照指示している。後者は、法理論における「平等」の問題と、「平等」を論じるために必要な比較の視点を問うている（Luhmann, 1965b: 52-68）。

（6）ここでは、フッサール全集（Husserliana, 1950）初期の諸巻に加えて、シュッツやM・メルロ＝ポンティらの現象学の文献を挙げている。ただしすでに、「間主観的な構成」はあくまで一つの「問題」であるとし、そこに超越論的な人格を招来するフッサールや、「事実」として不問に付すシュッツを批判している（Luhmann, 1967a: 111-112, 119＝一九八三b：九六―九七、一〇八、一一九―一二〇（二七―二九）、一二二―一二三（四四、四五））。

（7）Schütz（2004: 83-96＝二〇〇六：二五―三八）を参照。

（8）またこの著作で、「共通の人間生活に不可避の同時性」に言及し、シュッツの「共に年をとること」の議論を挙げている（Luhmann,

1968a: 11-12 (10) = 一九八八：二三、一六五（一〇））。この「同時性」については、本稿三・三を参照。またLuhmann（1968b: 208-209 = 一九九〇：二三〇―二三一、三三三―三三四（四七、四八））の「『同時』（gleichzeitig）に生きる他我の存在」を論じたものとしてのフッサールとシュッツへの言及も参照。

(9)「等価機能主義」については、Luhmann（1962）を参照。ちなみにこの論文では、まだシュッツとフッサールには言及されていない。

(10) ルーマンはここで言う「構成」（Konstitution）が「意味とシステムの関係」を指すとしつつ、この概念自体の曖昧さを註記している（Luhmann, 1971:30 (2a) = 一九八七：一〇五（二a））。「構成」概念の二義性の指摘に関しては、Schutz（1966c = 一九九八c）と、そこで参照されているFink（1976 = 一九七八）が背景にあると思われる。

(11) Luhmann（1964a: 55-59 = 一九九二：七四―七八）、Luhmann（1964b: 16-17 = 一九八三a：四三―四四）を参照。後者はシステム構造の形成に必要な「行動予期の一般化」として時間的・事象的・社会的な一般化（それぞれ「持続」「一貫性」「合意」とも言う）を挙げ、前者では公式組織の下でのそれらの一般化（それぞれ「規範」「役割」「制度」とも言う）を論じている。Luhmann（1965a: 84-93 = 一九八九：一四四―一五二）も参照。「行動予期の一般化」から「意味の三次元」への変化に関しては、Schützeichel（2003: 42-48）も参照。

(12) この語については、Litt（1926: 83.116. 特に86）を参照。以下に見る論文では言及がないが、『意味構成』では同書が参照されている（例、Schütz, 2004: 92 = 二〇〇六：二二）。リットもまたM・シェーラーを参照して汝と自我の体験を論じながら、対象認識に関する単純な主体―客体関係の図式を批判し、認識のパースペクティヴ性と相互性を主張している。また先の語は一般に「視界の相互性」と訳されることの方が多いが、シュッツとルーマンの他の用法と併せて、本稿ではPerspektive, perspectiveを「視角」と訳した。

(13) 引用箇所の註記ではG・H・ミードの諸文献と『意味構成』を、前者の役割概念の不明瞭さと、後者の意味概念が本質的に「主観」と結びついている点を批判しつつ参照している（Luhmann, 1971: 51 (24) = 一九八七：一一二―一一三（二四））。

(14) この時点では、後の「同期」（Synchronisation）と「同時性」（Gleichzeitigkeit）の区別が意図されていない。註（20）も参照。

(15) この箇所の註では「間主観性」の主観的な構成の挫折として、フッサールの『デカルト的省察』第五省察と遺稿集『間主観性の現象学』を挙げ、またSchutz（1966b=1998b）を参照指示している（Luhmann, 1984: 120 = 一九九三：四四九（四八、四九））。

(16) この上でルーマンは、フッサールはむしろ厳密さゆえに超越論的主観主義の陥穽から間主観性の問題を解決できなかったとし、Schutz（1966b = 一九九八b）を参照しつつ、それ以降の文献はこの「問題性」の深さを見失っていったと評している。また個々の「主観」に「固有の間主観性」が伴うことを示す研究に、パーソンズの「二重の偶有性」を挙げている（Luhmann, 1986b: 42 (2.3) = 二〇〇七a：一九四―一九五（二二三））。

(17) ここでルーマンが言う「操作」（Operation〔または「作動」〕）に関しては、Luhmann（1986a: 180 (15) = 一九九八：一〇六、二二一（一五））の説明を参照。

(18) ルーマンはフッサールに加えJ・ハーバーマスの名前を挙げ、「生活世界」の概念がこれまで批判の文脈で用いられてきたとし、区別の一方の側に生活世界を置き他方の側に批判の対象を置くやり方を斥けている（Luhmann, 1986a: 188＝一九九八：一一四―一一五）。

(19) この論文でも「同時性」（Gleichzeitigkeit）が「あらゆる時間性」、出来事やシステムに伴うとして、シュッツの「共に年をとること」を引いている（Luhmann, 1990b: 98-99）。

(20) ルーマンはさらに同時性を、「観察者」による「区別」の下で「区別されたもの」の「同時性」として論じ、それが現れる「現在」は「区別自体の統一」として「時間の観察」には「盲点」となると言う（Luhmann, 1990b: 129）。また「同時性」はシステムに不可避的に伴われるが、「同期化」（Synchronisation）はシステムの内部で処理されうるものであり、意味の事象次元と社会的次元で用いられる時間形式であるとしている（Luhmann, 1990b: 117-118）。

文献

Barber, Michael D., 2004, *The Participating Citizen*, New York: State University of New York Press.

Dallinger, Ursula, 1999, "Kommunikation, Verstehen, Verständigung", in: Ronald Hitzleret al. (Hg.), *Hermeneutische Wissenssoziologie*, Konstanz: UVK, 237-266.

Fink, Eugen, [1957] 1976, „Operative Begriffe in Husserls Phänomenologie", in: *Nähe und Distanz*, Freiburg/München: Karl Alber, 180-204.（＝一九七八、新田義弘訳「フッサールの現象学における操作的概念」、新田義弘・小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房、二一―四四。）

Jahraus, Oliver et al. (Hg.), 2012, *Luhmann Handbuch*, Stuttgart/Weimar: J.B. Metzler.

Kneer, Georg/Armin Nassehi, 1993, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, München: Wilhelm Fink.（＝一九九五、館野受男ほか訳『ルーマン　社会システム理論』新泉社）

Kundsen, Sven-Eric, 2006, *Luhmann und Husserl*, Würzburg: Königshausen & Neumann.

Litt, Theodor, [1919] 1926, *Individuum und Gemeinschaft*, 3.Aufl., Leipzig/Berlin: B.G. Teubner.

Luhmann, Niklas, 1962, „Funktion und Kausalität", in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 14(4): 617-644.

———, 1964a, *Funktionen und Folgen formaler Organisation*, Berlin: Duncker & Humblot.（＝一九九二―一九九六、沢谷豊ほか訳『公式組織の機能とその派生的問題』（上・下巻）新泉社）

———, 1964b, „Funktionale Methode und Systemtheorie", *Soziale Welt*, 15(1): 1-25.（＝一九八三a、村中知子訳「機能的方法とシステム理論」、土方昭監訳『ニクラス・ルーマン論文集1　法と社会システム』新泉社、一三―七〇。）

———, 1965a, *Grundrechte als Institution*, Berlin: Duncker & Humblot.（＝一九八九、今井弘道・大野達司訳『制度としての基本権』木鐸社）

———, 1965b, *Öffentlich-rechtliche Entschädigung rechtspolitisch betrachtet*, Berlin: Duncker & Humblot.

———, 1967a, „Soziologische Aufklärung", in: *Soziale Welt*, 18(2):

97-123.（＝一九八三b、土方昭訳「社会学的啓蒙」、土方昭監訳、前掲、七一―一一四.）

———. 1967b. „Soziologie als Theorie sozialer Systeme". in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*. 19(4): 615-644.（＝一九八三c、大里巌訳「社会システム理論としての社会学」、土方昭監訳、前掲、一二五―一七八.）

———. 1968a. *Vertrauen*. Stuttgart: Ferdinand Enke.（＝一九八八、野崎和義・土方透訳『信頼』未來社）

———. 1968b. *Zweckbegriff und Systemrationalität*. Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck).（＝一九九〇、馬場靖雄・上村隆広訳『目的概念とシステム合理性』勁草書房）

———. 1971. „Sinn als Grundbegriff der Soziologie". in: Jürgen Habermas/Niklas Luhmann. *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp. 25-100.（＝一九八七、佐藤嘉一訳「社会学の基礎概念としての意味」、佐藤嘉一ほか訳『批判理論と社会システムの理論』木鐸社、二九―一二四.）

———. 1984. *Soziale Systeme*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.（＝一九九三―一九九五、佐藤勉監訳『社会システム理論』（上・下）、恒星社厚生閣）

———. 1986a. „Die Lebenswelt". in: *Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie*. 72(1): 176-194.（＝一九九八、青山治城訳「生活世界」、『情況』二、九（一）：一〇一―一三二.）

———. 1986b. „Intersubjektivität oder Kommunikation". in: *Archivio di Filosofia*. 54(1): 41-60.（＝二〇〇七、村上淳一訳「間主観性かコミュニケーションか」、『ポストヒューマンの人間論』東京大学出版会、一六七―二〇二.）

———. 1987. „Autopoiesis als soziologischer Begriff". in: Hans Haferkamp/Michael Schmid (Hg.). *Sinn, Kommunikation und soziale Differenzierung*. Frankfurt am main: Suhrkamp. 307-324.（＝一九九三、馬場靖雄訳「社会学的概念としてのオートポイエーシス」、『現代思想』二一（一〇）：一〇九―一三〇.）

———. 1990a. „Das Erkenntnisprogramm des Konstruktivismus und die unbekannt bleibende Realität". in: *Soziologische Aufklärung 5*. Opladen: Westdeutscher Verlag. 31-57.

———. 1990b. „Gleichzeitigkeit und Synchronisation". in: *ibid*. 95-130.

———. 1997. *Die Gesellschaft der Gesellschaft*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.（＝二〇〇九、馬場靖雄ほか訳『社会の社会』法政大学出版会）

Nassehi, Armin. [1993] 2008. *Die Zeit der Gesellschaft*. 2. Aufl.. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

———. 2012. „Luhmann und Husserl". in: Jahraus et al. (Hg.). 2012. *ibid*. 13-18.

Schutz, Alfred. [1942] 1962a. "Scheler's Theory of Intersubjectivity and the General Thesis of the Alter Ego." in: *Collected Papers I*. Den Haag: Martinus Nijhoff. 150-179.（＝一九八三a、那須壽訳「シェーラーの相互主観性理論と他我の一般定立」、渡部光ほか訳『アルフレッド・シュッツ著作集　第1巻』マルジュ社、二三九―二七八.）

———. [1951] 1962b. "Choosing among Projects of Action." in: *ibid*. 67-96.（＝一九八三b、西原和久訳「行為の企図の選択」、渡部光

ほか訳，同上，一三五―一七二）

――――, [1953] 1962c, "Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action," in: *ibid*, 3-47.（＝一九八三c，那須壽訳「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」，渡部光ほか訳，同上，四九―一〇八）

――――, [1955] 1964, "Equality and the Meaning Structure of the Social World," in: *Collected Papers II*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 226-273.（＝一九九一，西原和久訳「平等と社会的世界の意味構造」，渡部光ほか訳『アルフレッド・シュッツ著作集　第3巻』マルジュ社，二〇五―三六四）

――――, [1941] 1966a, "Edmund Husserl's Ideas, Vollume II," in: *Collected Papers III*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 15-39.（＝一九九八a，那須壽訳「エドムント・フッサールの『イデーンII』」，渡部光ほか訳『アルフレッド・シュッツ著作集　第4巻』マルジュ社，五五―八六）

――――, [1957] 1966b, "The Problem of Transcendental Intersubjectivity in Husserl," in: *ibid*, 51-83.（＝一九九八b，西原和久訳「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」，渡部光ほか訳，同上，一〇一―一三八）

――――, [1959] 1966c, "Type and Eidos in Husserl's Late Philosophy," in: *ibid*, 92-115.（＝一九九八c，西原和久訳「フッサール後期哲学における類型と形相」，渡部光ほか訳，同上，一五七―一八四）

Schütz, Alfred, [1932] 2004, *Werkausgabe Band II, Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Konstanz: UVK（＝二〇〇六，佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』〈改訳版〉，木鐸社）

Schützeichel, Rainer, 2003, *Sinn als Grundbegriff bei Niklas Luhmann*, Frankfurt am Main/New York: Campus Verlag.

Wagner, Helmut R., 1983, *Alfred Schutz*, Chicago/London: The University of Chicago Press.

大黒屋貴稔，二〇〇二，「観察者は循環である」，『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第二分冊，四〇：八九―九六

多田光宏，二〇一三，『社会的世界の時間構成』ハーベスト社

長岡克行，二〇〇六，『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房

馬場靖雄，二〇〇一，『ルーマンの社会理論』勁草書房

森元孝，二〇〇一，『アルフレッド・シュッツ』東信堂

吉澤夏子，二〇〇二，『世界の優さの社会学』勁草書房